「NPO法人湖東焼を育てる会」だより

炎の美

創刊号

20141015

彦根市本町一丁目6-22
http://www.kotoyaki.com/

NPO 法人 湖東焼を育てる会

湖東焼は、江戸時代後期に彦根で焼かれた焼物です。13 代井伊直弼(なおすけ)の頃には、彦根藩が経営する藩窯(はんよう)として黄金時代を迎え、当代の焼物を代表する高い完成度を示す焼物が焼成されました。ところが昨今では、「幻の湖東焼」と称されるほど、湖東焼の名前も作品も知られることが少なくなってしまいました。

私たち NPO 法人湖東焼を育てる会では、これまで、湖東焼の講演会・展示会・絵付(えつけ)や作陶(さくとう)の体験教室など多様な事業を実施して、かつて彦根に華(はな)開いた湖東焼の普及と啓発に努めてきましたが、今年度から新たに湖東焼窯場跡で採集された資料の整理作業に着手することにいたしました。

「湖東焼窯場跡」採集品の整理作業を公開します

整理作業は、まず、①付着している土を洗浄し、②乾燥させます。次いで、③出土地点、出土状況などを資料の隅に詳細に記入(マーキング)し、④1 点 1 点の写真撮影や⑤実測作業を行います。将来は、これらのデータをまとめた⑥報告書の刊行や、⑦展示活用なども考えています。

窯場跡の採集品は、ほとんどが破片でしかありませんが、それを焼いた窯場で採集したものであることから、間違いのない湖東焼の破片と言うことができます。その意味では一級の資料であり、今後の湖東焼研究に大いに貢献(こうけん)できるものと期待しています。

今回は、このような整理作業の一旦を、下記の予定で公開いたします。整理作業は、彦根市指定文化財である旧彦根藩善利組(せりぐみ)足軽屋敷「服部家住宅」をお借りして実施しています。公開当日は足軽屋敷の建物とともに、整理作業の様子をご覧ください。

【公 開 日】10 月 25 日(土)・26 日(日)
10:00～16:00
【公開場所】　服部家住宅（右地図参照）

湖東焼窯場跡の本窯発掘調査状況

湖東焼の歴史を紐解く①

一世を風靡した焼物　湖東焼

湖東焼は、江戸時代後期に彦根城下内船町の商人絹屋（伊藤）半兵衛らによって、民窯として始められました。絹屋窯は 13 年続きました。この間、半兵衛はもとより、伊万里、後には瀬戸などから招聘された職人の努力の甲斐あって、相当の良品を制作することができるようになりました。ただ、販路の開拓には苦労が絶えませんでした。

天保13（1842）、絹屋窯は彦根藩へ召し上げとなり、藩の直営で維持されるようになります。当時の藩主井伊直亮は雅楽器の収集など美術品をこよなく愛好する人物でした。彼のもとで湖東焼は洗練された高級品生産にますます拍車がかけられることになりました。そして、次の藩主井伊直弼の代に黄金時代を迎えることになります。

直弼は藩主となるや直ちに窯の規模を拡大し、職人の獲得と養成に力を注ぎました。職人の数は最盛期には50 人を超えました。こうした技術陣営を背景に、やがて窯場では多くの優品が焼成され、湖東焼の名はゆるぎないものとなり、黄金時代を迎えることになったのです。黄金時代には、白く焼き締まった磁器を中心に、細やかで美しい作品が数多く焼成されました。それらの作品は、江戸時代後期の日本の焼物を代表する高い完成度を示していました。

ところが、黄金時代の幕切れは突然やってきました。直弼が桜田門外で横死すると、彦根そして窯場は騒然となりました。湖東焼はパトロンを失い、そのうえ藩が苦境にたたされたのです。こうなると職人の動きは早く、瞬く間に約半数が彦根を出奔してしまいました。かろうじて残った職人により、約 2 年の間、窯の火は点り続けました。まるで直弼の死を弔うかのように。

しかし、次々と去っていく職人にはいかんともし難く、わずかに残った山口喜平らにより、窯場は再び民窯として明治 28 年まで細々と存続することになります。ただ、製品からはかつての湖東焼の面影はしだいに薄れていきました。技術も客筋も当初のままでは有り得なかったのです。

彦根城下に現存する絹屋半兵衛の屋敷